

## 東京の鳥瞰図の活用

渋谷区立千駄ヶ谷小学校 内井 利樹

## 1 はじめに

新学習指導要領には地図帳や地球儀の活用がいっそう重視されることが明記されています。どのような活用の仕方をすれば、社会的事象の見方や考え方を育てるとともに、地図帳を進んで開こうとする子どもを育てていくことができるのでしょうか。

さまざまな方法が考えられますが、地図帳を開くことでこれまで気付かなかったことに気付いたり、考えが広がったりしていくような活用ができればいいのではないのでしょうか。

## 2 東京の鳥瞰図

『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』（以下、地図帳）p.41～43に「空から首都・東京をながめてみよう—鳥瞰図—」があります。普通のページと比べて立体的に描かれていて、楽しいイラストも多いので、東京都だけではなく他地域に住む子どもたちにとっても興味深いページだと思います。このようなページを有効に使うことができると、地図をほとんど使ったことがない4年生にとって

は地図学習に対する興味・関心が大いに高まるのではないのでしょうか。また、鳥のように空高くから全体を見たり、低く下りてきて部分を見たりすることは、地図の見方や考え方を育てる上で大変有効なことではないかと思います。

このページをよく見ると、地名が赤や青で囲まれていたり、赤い字で書かれていたりしている場所があります。囲まれている場所は浄水場や取水堰で、赤い字で書かれているのは防災にかかわる場所と国立公園・国定公園です。今回は特に「くらしをささえる水」と「災害からくらしを守る」の単元におけるこのページの活用例について紹介します。

## 3 「くらしをささえる水」の実践例

2年前に4年生を担当したときに、この単元の導入で東京都の地図を見せながら「自分たちが飲んでいる水はどこから来るのだと思う？」と問いかけたことがありました。すると子どもたちは「井の頭公園の池」「奥多摩湖」「村山貯水池」「多摩川」などと、口々に当てずっぽうな予想をしていました。そのときは普通の表現の地図を見せていたので地図の利用はそこまでとなり、その後は副読本や教科書などを活用した授業を展開しました。副読本の地図には水源林やダム、浄水場など水道に関係する場所が示されているので、学習にはとても便利なのですが、地図から読み取るという学習には向きません。



図1 『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』p.41～43

しかし、地図帳p.41～43の鳥瞰図があれば子どもたちは地図を指でたどって水源林から取水堰、浄水場を見つけることができるでしょう。この指でたどる学習をすることで、水は私たちが住む町からずいぶん離れたところからくること、水源地は山の方であること、他県からも水が運ばれてくること等々のことに気づくことができます。導入の段階で地図をじっくりと見ながらさまざまなことを読み取ることができれば、水の学習に対する関心が高まるだけでなく、水源林やダムなどに対する予想を立てることにもつながります。そこから先のルートや浄水場で働く人のくふう・努力などについては地図帳からは読み取ることができませんが、そこからは副読本や教科書を使って調べる学習を展開すれば、子どもの思考に沿って学習を進めることができると思います。

#### 4 「災害からくらしを守る」の実践例

地図帳p.41～43の鳥瞰図には、立川広域防災基地や東京臨海広域防災公園、環七地下調節池、首都圏外郭放水路などの防災施設も書かれています。「災害」が関係する学習は、3～4年生にも5、6年生にもあります。それぞれねらいと内容が異なるので、いくつかのパターンに分けてこのページの活用方法を紹介したいと思います。

最初に3～4年生の「災害からくらしを守る」という単元での活用です。この単元における災害は、火災、風水害、地震などの中から選択して取り上げ、関係諸機関の働きとそこに従事している人々や地域の人々のくふうや努力を考える学習を展開します。

例えば風水害を例として地図帳p.41～43の鳥瞰図の活用を考えてみましょう。「東京都には風水害から自分たちのくらしを守るようなものがあるかな？」という問いかけに対して、環七地下調節池を取り上げて、妙正寺川や神田川との関連性に

ついて考え、学習を進めていく方法が考えられます。

第5学年では国土学習における自然災害の防止、第6学年では政治学習における災害復旧の取り組みを学習することになります。第5学年の単元では、例えば水害を防止するための設備として環七地下調節池を取り上げて、他地域の取り組みに学習を広げていく方法が考えられます。また、第6学年の単元では、立川広域防災基地を取り上げて、緊急時に救援活動を行ったり、災害復旧の施策を進めたりしていることについての学習が考えられます。



図2 『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』 p.41

#### 5 まとめとして

最後に東京都以外の地域に住む子どもたちにとっての活用例を考えてみましょう。例えば「東京都はこのようなになっているよ。だったら〇〇県はどうか？」と問いかけて、東京都の例を転移応用するような学習活動が考えられます。子どもたちには「東京都は近くの県の水源林やダムを利用していたから、〇〇県の近くの県も見てみよう。」という発想が生まれるのではないのでしょうか。

いずれの学習にせよ導入段階での活用が、子どもの興味関心を高めることにつながるのではないかと考えられます。